

「絶滅」クニマス生きていた

70年ぶりに確認

七十年ほど前に絶滅したとされていたサケの仲間のクニマスが、山梨県の西湖で生きていたことが京都大学総合博物館の中坊徹次教授(魚類学)らによって発見されました。日本魚類学会の論文に発表されます。絶滅したとされる魚が再び見つかったのは日本で初めてのことです。(今井尚)



西湖で見つかったクニマスのおす(上)とめす(下) = 京都大学魚類学教室提供



クニマスが見つかったのは富士五湖の一つ、山梨県富士河口湖町の西湖です。今年三月、西湖産のヒメマス(ベニザケのうち一生を湖や川でくらすもの)として京都大学に持ちこまれた魚を見た中坊さんが、体の特徴などからこれはクニマスではないかと疑問に思い、くわしい調査をするのにとしました。

中坊さんは、西湖でさ

山梨・西湖で 京大・中坊徹次教授



さかなクン

らに魚を集め、合計九匹を調べたところ、体の特徴や遺伝子調査の結果から、これらが絶滅したとされるクニマスであることを確認しました。

秋田から送られた卵の子孫か

クニマスは今から七十年ほど前まで秋田県仙北市に

また、これまでクニマスはヒメマスの亜種(同じ種でも色や特徴が地域によって変化したもの。亜種どうしは子どもをつくることのできる)ともいわれてきました。遺伝子検査の結果、西湖に数多く生息するヒメマスとの交雑が生じていないことがわかりました。そこで中坊さんは別種である

さかなクンが京大に持ち込んで「発見」へ

と結論付けました。京都大学に魚をもちこんだのは、朝小で連載中のさかなクンでした。中坊さんのすゝめで京都大学総合博物館に収蔵されているクニマスの標本や、かつてクニマスを見た人への聞き取り調査から、クニマスを絵で復活させようとしていました(朝小二〇一〇年三月十

た。ところが一九四〇年、三日付と同月二十日付の「おしえて さかなクン」掲載、一部日付のちがう地域も)。中坊さんに亜種とされるヒメマスの絵もかくようにすすめられたさかなクンが、西湖の漁師さんからヒメマスとして届けられた魚を京都大学に持ちこんだのです。

これが生き続けたものの中坊さんはいっています。中坊さんによると、絶滅したとされる魚類が再発見されたことはほかに例がないといえます。西湖では近い種のヒメマス漁が行われているほか、多くの釣り客が訪れる場所であることから、こうした人々の生活や観光と、クニマスの保護をどうやって両立させていくかが課題になりそうです。



二三メートル)にだけくらす日本固有の魚でした。サケやマスの仲間の魚ですが、海には下らず一生を湖で過ごす陸封型とよばれる仲間です。当時、田沢湖のクニマスは、普段は水深一〇〇〜二〇〇メートルほどと、サケの仲間では非常に深い場所にくらして卵を産む特徴をもっていたとされています。

最も近いヒメマスとの違いは、おもに体の色が黒

つぼく、斑点がないこと。田沢湖では昭和初期まではクニマス漁が行われ、多くの人が食用にしていたほどたくさんすんでいます。

今回見つかったクニマスは